
グダグダポケモンマスターへの道

タッキー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グダグダポケモンマスターへの道

【Nコード】

N8784V

【作者名】

タッキー

【あらすじ】

自分に判断力がないと痛感したサトシは3年振りに旅立ちを決意し、再度ジム巡りを始める。

サトシの新たな冒険が今始まる！

第1話：雨上がりの決意（前書き）

マサラタウンに大雨発生！？

記念すべき第一話です

3年後設定でサトシ13歳です。

まああんまり正確変わってませんが

駄文ですがそれでも良いという方はどうぞ

第1話：雨上がりの決意

サトシ

「いい天気だなあ…ピカチュウ？」

ピカチュウ

「チャアア…。」

この少年、名はサトシ。相棒のピカチュウと共にバトル&ゲット。3年前まで色々な地方を旅して来たが、現在は帰郷のマサラタウンで一休みしていた。

サトシ

「こういう天気の良い日はまさに絶好のトレーニング日和だな。だからピカチュウ！今日は久々にトレーニングだ！行くぞ！」

ピカチュウ

「ピカ！」

マサラタウンではここ連日大雨が降っていた。温暖なこの町にとって、連日で大雨が降るということは極めて稀である。

そんなこともありいつもより気合いが入るサトシ。

彼は他の仲間達がいる研究所へと向かった。

オーキド博士

「うーん…、この資料はちょっと…。ケンジ、その資料を取ってくれんか？」

ケンジ

「はい、分かりました。」

所変わって研究所。なにやら忙しい様子。
そんな時玄関のベルが鳴った。

オーキド博士

「おや？誰か来たようじゃ。」

ケンジ

「あ、僕が出ます。」

そう言うときケンジは玄関へと走って向かった。
ドアを開けるとそこにはサトシがいた。

ケンジ

「サトシじゃないか！どうしたんだい？」

サトシ

「久々にトレーニングしたいから庭を貸してくれないか？」

ケンジ

「ああ、博士に聞いてみないとわからないな。とりあえず中に入
て。」

サトシ

「おじゃまします。」

ケンジに迎えられ、サトシは研究所の中へと入った。

オーキド博士

「おお！サトシか！」

サトシ

「あの、トレーニングをしたいので庭を貸してもらえませんか？」

オーキド博士

「そういうことなら構わんぞ。」

サトシ

「じゃあ早速行こう。ピカチュウ！」

ピカチュウ

「ピイカ！」

研究所の庭を使う許可をもらったサトシは元気よく掛けていった。

オーキド博士

「相変わらずサトシは元気じゃな。」

ケンジ

「そうですね。」

庭に着くとサトシのポケモン達が集まってきた。

サトシ

「みんな、今日は久々にトレーニングだ。気合いいれていくぞ！」

サトシがそう言うと、ポケモン達も揃って気合いの声をあげた。

サトシ達がトレーニングを始めて数時間後、大雨が降り始めた。

オーキド博士

「また雨か…。」

ケンジ

「今日は晴れると思ったんですけどね…。」

オーキド博士

「こりゃサトシのトレーニングも中止じゃな。迎えにいかんと。」

オーキド博士は椅子から立ち上がると、庭へ向かった。

オーキド博士

「サトシ、風邪引くといかんから中へ入りなさい。」

サトシ

「あ、博士！そうしたい所なんですけどポケモン達が…。」

サトシの言葉につられ、博士はポケモン達を見た。するとポケモン達は戦闘体制に入っていた。ポケモン達が見る先には一匹の緑色のポケモンがいた。

オーキド博士

「あれは…ニョロトノ？何故こんな所に…。」

ニョロトノ

「トニョ〜ロ！」

ニョロトノと呼ばれたポケモンはいきなりハイドロポンプを放って

きた。

サトシ

「うわっ！いきなり何するんだよ！」

サトシの声を無視してもう一度ハイドロポンプを放つニョロトノ。

サトシ

「オーダイル！こつちも“ハイドロポンプ”だ！」

オーダイル

「オーダー！！」

オーダイルと呼ばれたポケモンはニョロトノと同じ技で攻撃を防いだ。

しかしニョロトノは瞬時に冷凍ビームを繰り出してきた。

サトシ

「まずい！フローゼル、“アクアジェット”！」

フローゼル

「フロオオ！」

今度はフローゼルと呼ばれたポケモンがアクアジェットで冷凍ビームに突っ込んで行く。
冷凍ビームの攻撃を受け、凍てつくフローゼルだがアクアジェットの勢いは止まらない。

ニョロトノ

「ニョ…ニョロ…？」

その光景を見て慌てるニョロトノ。

サトシ

「行っけえええ！！“氷のアクアジェット”！！」

氷のアクアジェットをモロにくらったニョロトノは効果は今ひとつながらも大ダメージを受けた。

ケンジ

「うわっ！何だこれは！？」

2人の帰りが遅いので駆けつけてきたケンジは、サトシとニョロトノの攻防を見て驚いた。

オーキド博士

「来たのかケンジ。わしが見たときにあのニョロトノがいていきなり襲って来たんじゃないよ。」

ケンジ

「そうなんですか…。」

博士とケンジが会話をしていると、ニョロトノが歌を歌い始めた。するとニョロトノを含め、周りにいたポケモン全員から赤黒いオーラが発生した。

ケンジ

「これはっ…もしかして…！」

オーキド博士

「間違いない…“滅びの歌”じゃ…！」

滅びの歌は自分を含む歌声を聴いたポケモン全てを一定時間後に戦闘不能にする強力な技である。

サトシ

「くそっ…このままじゃみんなが…。ここは一気に決めるしかない！みんな下がってて！」

何かを思いついたのかポケモン達を後退させるサトシ。しかし一匹だけ後退をさせずに技を指示する。

サトシ

「ギガイアス！“大爆発”だ！」

ギガイアスは一瞬ためらうも、言われた通りに大爆発を発動する。

大爆発を受けたニョロトノはその凄まじい威力に耐えきれずにギガイアスと共にその場に倒れた。

その直後、先程まで降っていた大雨が止んだ。

オーキド博士

「（あの大雨が止んだ…？待てよ…たしかニョロトノ特性は‘湿り気’と‘貯水’だった筈…。だがあのニョロトノは…まさか…！？）ケンジ、サトシ。ちょっと付いて来てくれ。」

ケンジ

「え？あっはい！」

サトシ

「え！？ちよっと待ってくれよケンジ。戻れギガイアス。」

戦闘不能になったギガイアスをボールに戻すとサトシはケンジのあとに付いていった。

博士に呼ばれ研究所の中へと入っていくケンジとサトシ。

ケンジ

「博士、一体何ですか？」

オーキド博士

「それはお前さん達に見てもらいたい資料があつてな。」

そう言う博士は本棚から『ハウエンの伝説』という分厚い本を取り出した。

博士はページをめくりながらサトシ達に話を始めた。

オーキド博士

「ケンジ。ニョロトノの特性は何か知っているだろう？」

ケンジ

「勿論です。‘貯水’か‘湿り気’ですよね。」

オーキド博士

「その通りじゃ。しかし先程のニョロトノはアクアジェットでダメージを受け、更に大爆発の発動も許した。つまりあのニョロトノはどちらの特性でもないということじゃ。」

貯水は水タイプの技を受けると、ダメージを受けずに寧ろ回復する特性。

湿り気は大爆発などの爆発系の技等を封じ込める特性である。

サトシ

「そういえば確かに…。」

オーキド博士

「それで思いついたのがこのポケモンじゃ。」

博士は本に描かれている青いポケモンを指差した。

ケンジ

「これは…カイオーガ!？」

サトシ

「カイオーガの特性は確か…。」

ケンジ

「雨降らし…。」

雨降らしはそのポケモンが戦闘体制に入ると豪雨を発生させる特性である。

オーキド博士

「サトシ。雨が降り始めたのはいつからじゃ?」

サトシ

「ニョロトノが現れて丁度です。」

オーキド博士

「やはりな…。ニョロトノが現れてから雨が降り始めた。そしてニ

ヨロトノが倒れた直後、雨が止んだ。」

ケンジ

「ということはあのニヨロトノの特性は『雨降らし』！？でもそんな特性を持ったニヨロトノなんて今まで発見例がありませんよ!？」

オーキド博士

「じゃからわしも驚いている。」

サトシ

「……。」

ケンジ

「ん、どうしたんだいサトシ？」

急に黙り込むサトシに問い掛けるケンジ。

サトシ

「いや…さっき俺ギガイアスに“大爆発”を指示しただろ？でも考えてみればひどいことしたなあ…と思つてさ。」

ケンジ

「どうしてそう思ふんだい？」

サトシ

「だって、“滅びの歌”の発動を防いでポケモン達を守ろうとしておいてギガイアスは犠牲にしちゃつてさ…。とつさの判断とは言えやっぱり…。」

サトシの言っている事は合っている。ポケモン達を戦闘不能にさせ

まいとしているのにもかかわらずギガイアスを戦闘不能にしたのはまるで生贄を捧げた様なものである。

サトシ

「俺には判断力が無いって痛感させられるよ……。3年経つてもちつとも成長してないな俺って……。」

ピカチュウ

「ピカピ……。」

ピカチュウが心配そうにサトシを見る。

サトシ

「決めた。俺、もう一度旅に出る。」

ケンジ

「サトシ!？」

サトシ

「こんなじゃポケモンマスターなんて夢のまた夢だ。判断力をつけるためにももう一度旅に出る。」

オーキド博士

「いつか言つと思っておつたよ。」

サトシ

「え!？」

博士の意外な言葉に驚くサトシ。

オーキド博士

「行つてきなさいサトシ。やはりお前さんは旅をしている時が一番似合う。」

サトシ

「ありがとうございます！」

オーキド博士

「出発は明日の朝がいいじゃろ。」

サトシ

「そうですね。じゃあ今から家に帰って旅の準備をします。」

そう言うとサトシは自分の家へと帰っていった。

ケンジ

「流石サトシ、行動が早いな。」

オーキド博士

「そうじゃな。さてケンジ。わしらは例のニョロトノについて新たに研究を始めるぞ。」

ケンジ

「分かりました。」

翌朝。サトシの旅立ちを見送ろうと大勢の人が集まっていた。

ハナコ

「サトシ、ハンカチは持った？ティッシュは？パジャマは？」

サトシ

「ママ…子供じゃないんだから大丈夫だよ。」

こちらはサトシの母親のハナコ。ちなみに父親はトレーナーとして各地を放浪している為ここにはいない。

ハナコ

「ホントに気を付けてよ。あなたはパパに似て無鉄砲なんだから。」

サトシ

「分かってるって。無茶はしないから。」

オーキド博士

「それでサトシ。連れていくポケモンはピカチュウだけでいいのか？」

サトシ

「はい。一応バトルの時は呼び出しますけど、旅に連れて行くのはピカチュウだけにします。」

ケンジ

「サトシ、もし旅の途中であのニョロトノみたいなポケモンを見かけたら報告してくれないかい？僕はここを離れる訳にはいかないから。」

サトシ

「OK、お安いご用さ。それじゃあ行ってきますー！」

ハナコ

「頑張つてねサトシ。」

大勢の人に見送られてサトシはマサラタウンを後にした。

サトシが旅立つ時に時に町の上空に七色に光る虹がかかっていたことは誰も気付かなかった。

第1話：雨上がりの決意（後書き）

サトシ

「さあ、新たな冒険の始まりだぜ！」

ケンジ

「サトシ、言い忘れてたけどこれからサトシが旅するカントー地方で旅のメンバーの全てを集めるらしいよ。」

サトシ

「ということはあいつらに会えるってことか！！ワクワクして来たぜ！！」

ピカチュウ

「ピカピカ！！」「それでは次回をお楽しみに！！」

第2話・決戦トキワジム（前書き）

今回はバトルメインです

サトシがどんなポケモンを使って戦うかは楽しみに

第2話：決戦トキワジム

マサラタウンを旅立ったサトシは1番道路を抜けてトキワシティに
来ていた。

サトシ

「さあ着いたぞ、トキワシティ！」

ピカチュウ

「ピカピカ！！」

サトシ

「ポケモンマスターという夢を実現させるためにはやっぱりバトル
が一番！というわけでこの旅ではジムに再挑戦してみようと思う。
どうだピカチュウ、いい考えだろ？」

ピカチュウ

「ピカチュウ！！」

ピカチュウは大きく頷いた。どうやら賛成のようだ。

ピカチュウの返事を受け取ったサトシは、ジム戦の準備の為にポケ
モンセンターへと向かった。

センターでジム戦に挑戦させるポケモンを3匹を呼び出した後、ト
キワジムへ直行する。

サトシ

「頼もー！！ジム戦をしに来ましたー！！」

まるで道場破りの様に威勢良く叫ぶ。

「???」

「おやおや…これまた随分元気なトレーナーが来たもんだねえ…。
丁度暇だった所さ、今すぐ相手をしてあげるよ。」

ジムの奥からゲンガーを連れた老婆がうつすらと現れた。どうやら
ジムリーダーのようだ。

キクコ

「あたしの名前はキクコ。お前さんの名前と出身地は?」

サトシ

「マサラタウンのサトシと言います。」

キクコ

「サトシか…分かった。それじゃあそろそろ始めようとするかえ。」

そう言うときクコはトレーナーフィールドへ移動する。同じくサト
シもトレーナーフィールドへ移動する。

キクコ

「ルールは3対3のシングルバトル。どっちかのポケモンが全て戦
闘不能になったら試合終了だよ。まずはあたしはゲンガーでいこう
かね。」

サトシ

「まずはゲンガーか。だったらこっちはヨルノズク!!君に決めた
!!」

ボールから出てきたヨルノズクは煌びやかな光を纏いながら現れた。

キクコ

「色違いとは随分珍しいのをもっているんだねえ…。まあいい…。先攻はチャレンジャーからだよ！」

キクコの合図でバトルが始まった。

サトシ

「それじゃあ遠慮なく、ヨルノズク！！“見破る”だ！！」

ヨルノズクはゲンガーを見破った。これでゴーストタイプのゲンガーにもノーマルタイプの技を当てる事が可能になった。

サトシ

「続けて“体当たり”！！」

ヨルノズクの体当たりがゲンガーにクリンヒットした。

キクコ

「なかなかやるねえ坊や…。」

サトシ

「ヨルノズク！！今度は“思念の頭突き”だ！」

毒タイプを持つゲンガーには有効のエスパータイプの技で攻撃を図るサトシだが…。

キクコ

「させないよ！ゲンガー、雷！！」

ヨルノズク

「ヨルノウウ！！」

サトシ

「ヨルノズク！！」

ヨルノズクの技が当たる前にゲンガーの雷を喰らってしまう。
雷の威力に耐えきれずにヨルノズクは敢え無く戦闘不能となる。

サトシ

「一撃！？くっ…！戻れヨルノズク！！」

ヨルノズクが一撃で倒され、焦るサトシ。

サトシ

「頼んだぞ、ベトベトン！！」

ベトベトン

「ベトォ〜。」

キクコ

「今度はベトベトンかえ。」

サトシ

「ベトベトン！！“悪の波動”！！」

キクコ

「ゲンガー、こっちも“悪の波動”！！」

ゲンガー

「ガアアア!!」

悪の波動と悪の波動がぶつかり合い、消滅する。
力は拮抗しているようだ。

サトシ

「ここは戦法を変えて…“小さくなる”だ!!」

サトシの指示で体を縮め小指程の大きさになるベトベトン。この広いジムではそう簡単に見つけることは出来ない。

キクコ

「おのれ…どこへ行った!？」

必死でベトベトンを探すキクコとゲンガー。

サトシ

「今だベトベトン!連続で“悪の波動”!!」

小さくなったまま悪の波動を連射するベトベトン。

居場所が特定出来ないゲンガーは運悪く全ての攻撃を受けてしまい、戦闘不能となる。しかし…同時にベトベトンも戦闘不能になる。

サトシ

「何でだ!?!何でベトベトンも一緒に…!!」

キクコ

「“道連れ”さ…。あたしのゲンガーが戦闘不能になる直前で使っていたんだよ。」

道連れは自分が戦闘不能になった時同時に相手も戦闘不能に導く技である。

サトシ

「その手があったか…。戻れベトベトン。」

キクコ

「さてあたしの二番手は…そうだねえ、かつてこのジムのリーダーのエキスパートの地面タイプで行くか。頼んだよゴルーグ！…」

ゴルーグ

「ゴルウー！！」

サトシ

「最後だ…頼んだぞガブリアス！！」

ガブリアス

「ガアアアア！！」

ゴルーグはゴースト・地面。

ガブリアスはドラゴン・地面。

地面タイプ対決となった。

ガブリアス

「先手必勝！ガブリアス、“ストーンエッジ”！！」

ゴルーグに向かい無数の岩を飛ばすガブリアス。

キクコ

「ゴルグ、 “ 岩砕き ” で全部壊しちゃいな！！」

飛んでくる岩全てを岩砕きて粉碎するゴルグ。流石のサトシもこれには驚く。

サトシ

「何！？だったら真っ向勝負だ！！ “ ドラゴンダイブ ” ！！！」

キクコ

「力比べならこっちに分がある。ゴルグ、 “ ヘビーボンバー ” ！！！」

攻撃力ではガブリアスの方が上だが、技の効果を見るとゴルグの方が遥かに強い。

キクコ

「休まず攻めるよ、 “ シャドーパンチ ” ！！！」

サトシ

「避けるガブリアス！」

ゴルグの攻撃を避けようとするガブリアスだがその努力は虚しく当たってしまった。

キクコ

「シャドーパンチは必中技。そう簡単に避けられるものじゃないよ。」

サトシ

「くそっ……！ガブリアス “ 穴を掘る ” ！！！」

地面に穴を掘って次の攻撃に繋げようとするサトシ。

キクコ

「逃げようったてそうはいかないよ！“地震”！！」

サトシ

「しまった！！」

穴を掘るを使っている時、に地震を喰らうと受けるダメージは倍近くなる。

ガブリアスは思わず途中で地面から飛び出してしまった。

キクコ

「さあ、やっておしまいゴルグ。“シャドーパンチ”！！」

ガブリアスは体制を立て直す前に爆裂パンチを受けてしまい戦闘不能となる。

サトシ

「…………よくやってくれた。戻れガブリアス。」

ガブリアスをボールに戻すとフラフラとした足取りでジムをの入り口へ向かうサトシ。

サトシ

「キクコさん、バトルありがとうございました。」

キクコ

「また挑戦するならいつでもおいで。」

サトシ

「はい…。」

そう言つてサトシはジムをあとにした。

その日の夜のポケモンセンター。

サトシ

「みんな、今日はごめんな。」

ジム戦に出たヨルノズクとベトベトンとガブリアスは別に構わないと言つような素振りを見せる。

だがサトシはポケモン達の力を最大限に生かすことが出来なくて後悔している。

そこへ…。

???

「あれ、師匠？こんな所で会うなんて偶然ですね。」

誰かがサトシのことを師匠と言つて話しかけてきた。

サトシ

「ん、師匠？ということはまさか…。」

サトシが声がした方に振り向くとそこには弟子のカズチがいた。

サトシ

「やっぱりカズチ！！久しぶりだなあ！」

カズチ

「お久しぶりです師匠。ところでどうしたんですか？柄にもなくため息なんてついて…らしくないでしね。」

サトシ

「いや…ちょっと今日バトルで負けちゃってさ…。」

カズチ

「師匠でもそんなことあるんですね。」

サトシ

「当たり前だろ…。」

カズチ

「ははは…。師匠は今旅の途中ですよ。今までずっと旅をしていたんですか？」

サトシ

「いや、一旦故郷のマサラタウンに帰ってトレーニングしてたんだ。改めて旅に出たのはついこの前さ。」

カズチ

「そうなんですか。それで師匠はこれからどちらに？」

サトシ

「取りあえずトキワの森を抜けてニビシティに行く予定さ。」

カズチ

「なる程。あの師匠？」

サトシ

「何？」

カズチ

「僕も師匠の旅に付いていつていいですか？」

サトシ

「え！？」

突然の言葉に啞然とするサトシ。

カズチ

「弟子として、師匠の活躍は間近で見たいもの。お願いします！僕を師匠の旅に同行させて下さい。」

先程から師匠師匠と言っているが、サトシは弟子をとった覚えはない。一方的に師匠扱いされているだけである。

サトシ

「いや、まあ…別にいいけどさ…。仲間が増えるのは嬉しいし…。」

カズチ

「本当ですか！？ありがとうございます！」

そんなこんなでカズチが旅の仲間に加わり、これからの旅が一層楽しくなるのであった。

サトシ

「なあピカチュウ。カズチってあんな熱血だったっけ？」

ピカチュウ

「ピカア〜。」「

第2話：決戦トキワジム（後書き）

サトシ

「なんで俺こんなにネガティブなんだピカチュウ？」

ピカチュウ

「ピカァ〜…。」

カズチ

「師匠、これからの旅頑張りますよう！」

サトシ

「なんでカズチはこんなに元気なんだピカチュウ？」

ピカチュウ

「ピ…ピカァ〜…。」

キクコ

「次回をお楽しみに、フェッフェッフェ…。」

サトシ

「もうやだ…。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8784v/>

グダグダポケモンマスターへの道

2011年10月9日13時33分発行